

## 「奥瀬家日記抜書」について（二）

### 一 はじめに

盛岡藩は、陸奥国北・三戸（以上、青森県）・二戸・九戸・閉伊・岩手・志和・稗貫・和賀（以上、岩手県）・鹿角（秋田県）の一〇郡を領有した一〇万石（文化五年から二〇万石に格上げ）の外様中藩（のち外様大藩）で、南部氏が信直・利直・重直・重信・行信・信恩・利幹・利視・利雄・利正・利敬・利用・利済・利義・利剛・利恭と一六代にわたって在封し、他藩より一年早い明治三年（一八七〇）に廃藩置県を断行した。

この盛岡藩に関する史料の多くは、現在、岩手県立図書館や盛岡市中央公民館などに比較的まとまった状態で所蔵されている。これらの史料のなかには、「雑書」（盛岡市中央公民館所蔵）や「内史略」、「参考諸家系図」（以上、岩手県立図書館所蔵）などのように活字化され、盛岡藩研究の基本史料として広く利用されているものも多い。しかし、両施設に所蔵されている史料の量は膨大であり、未だ活字化されることなく、利用者が一部に限定されているものも少なくない。また、これらの活字化されていない史料のなかには、十分な解題が施されないままに利用されているものも

ある。

そこで前号（細井計・兼平賢治「奥瀬家日記抜書」について（一））では、江戸時代前期の盛岡藩の動向を知る上で注目される「奥瀬家日記抜書」（盛岡市中央公民館所蔵、二冊組）について、その解題を施すとともに、利用に便利するように、表題を「奥瀬家日記抜書 自慶安四年至寛文四年」とする一冊分の解読文を紹介した。本稿では、紙面の制約から前号で紹介できなかった、表題を「奥瀬家日記抜書」とするもう一冊分の解読文を紹介し、広く一般に供したいと思う。

### 二 「奥瀬家日記抜書」の解読

#### 凡例

- 一、本稿では、「奥瀬家日記抜書」に収録されている記事をすべて翻刻した。
- 二、読解に便利のように、適宜読点（、）や並列点（・）を打った。
- 三、漢字の旧字体や異体、仮名の変体等については、原則とし

兼\*細\*  
平 井  
賢 計  
治

（二〇〇〇年一〇月二一日受理）

てこれを避け、今日通行の字体に改めた。例えば、「ろ」、「者」、「江」、「茂」、「而」、「禮」等は、それぞれ「より」、「は」、「へ」、「も」、「て」、「礼」等とした。ただし、「廿」等そのままとしたものもある。

四、解読者の傍注はすべて括弧にくくり入れた。

一 花巻城ハ、山陰中将ノ末葉大和守、小瀬川本館より永録年中花巻城へ移、大和守天正三年之比病死、其子九郎住所被申候処、郡山之城主御所と申成候人、天正三年之比花巻ノ城責落、九郎事、落城已後、〇〇〇〇〇、其後郡山御所当<sup>（マ）</sup>家古信濃守令追伐被申、信濃守手ニ入相統令領知候

一 寛永十三年、江戸御城御堀御普請御手伝被仰付候節、役者之覚、奉行檜山五左衛門・毛馬内左京、下奉行小枝指権兵衛・佐藤善兵衛、同心頭中里半兵衛同心衆三十人、田代治兵衛同心衆三十人、太田縫殿助同心衆三十人、步行頭儀俄惣左衛門步行衆十人、人足奉行内野嘉左衛門・宮永三右衛門・石橋新三郎・苦米地弥左衛門・穴沢采女・小軽米藤藏・横浜金十郎・一条寛左衛門・月館半九郎・七戸喜藏・藤根重太郎・畠沢甚内・高橋内記・大沢吉右衛門・枋内小左衛門・吉田作七・石河久膳・山口助五郎・北湯口主膳・斎藤市兵衛、人足奉行廿人也、割之衆布施庄兵衛・戸来半助、物書畠中清三郎、台所伊藤新助・小向才次郎、材木縄竹奉行花崎弥三郎・横浜太郎右衛門、小買物佐々木弥兵衛・江柄九郎兵衛、右之通也

一 正保二年、江戸御堀浚御普請役者之覚、奉行檜山五左衛門・内堀織部、下奉行小枝指権兵衛・佐藤善兵衛、同心頭田代治兵衛同心衆十人、三ヶ尻弥兵衛同心衆十人、步行頭向定右衛門步行衆十人、下河原武右衛門步行衆十人、人足奉行石橋新兵衛・穴沢采女・奥道宇右衛門・高橋内記・一方井庄作・志田庄

藏・煙山七郎兵衛・畠沢勘九郎・美濃部作左衛門・儀俄惣左衛門・一条寛左衛門、割之衆布施庄兵衛・田鏑太郎左衛門・戸来半助、物書矢羽々八右衛門・多田茂右衛門、台所畠中久右衛門・糠塚次郎右衛門、材木縄竹奉行中野新十郎・小向次郎左衛門、右之通也

一 慶安五年五月廿日、工藤右馬助宇治へ御壺五持登ル

一同十月二日、評定所より伊豆殿・右京殿・出雲殿御名付にて御切紙参、家来之者被遣候様ニ申参、内蔵助参被 仰渡候ハ、去年秋田領・南部領境論ニ付、双方百姓被召上候処、去年被相返候、然<sup>（佐竹義徳）</sup>ニ佐竹殿百姓ハ従当夏相詰候間、御領分之百姓御より候様ニ、尤絵図之義ハ、山形絵図ハ入不申候、紙絵図ニ被成御上候様ニと御座候

一 十一月二日、目時勘太夫・望月長兵衛・古人上下拾九人上着

一 十一月廿五日、阿部豊後殿・安藤右京殿・松平出雲殿・石谷将監殿・神尾備前殿御名付にて御評定場より御切紙参、秋田・南部境論之所之百姓被呼登候ハ、来二日ニ御評定場へ御出し候様ニと申参候、御返事いまた上着不仕候、二・三日中上着可仕候間、従是可申上由被仰遣

一 十二月廿四日、阿部豊後殿・松平伊豆殿へ、先達て被仰付候秋田領・南部領境目存候百姓より為上申候由、被仰遣之

一 承応二年正月廿二日、阿部豊後殿より御手紙参、秋田・南部境論百姓御評定所へ家来指添御出シ候様ニ申参、則勘左衛門御使ニ参御口上、古人相煩候て出シ不申迷惑之由被仰遣之

一 二月十二日、四時分松平伊豆殿其外御評定所より御手紙参、勘左衛門・長兵衛・勘太夫古人召連罷出候事

一 二月廿五日、阿部豊後殿御評定所より手紙参、古人共長兵衛召連出、様子御聞被成

一 三月四日、御触無之候へ共、御寄合日ニ出候へと兼て被仰出候

付、古人共長兵衛召連出

一 五月二日、大猷院様御年忌ニ付、日光へ御名代御使者漆戸勘  
左衛門被<sup>正成</sup>仰付、同五日発足、御香奠十枚被献之<sup>同日、日光よ</sup>り勒左衛門歸府

但、阿部豊後様より御病中候間、名代使者にて御香奠上候様ニ被仰渡候  
付也

一 五月廿五日、宇治へ御茶壺為持向定右衛門登ル

一 六月四日・五日之比、岡覚右衛門御暇被下、以来脇へ奉公御か  
まい可被成旨被仰渡之

一 六月廿三日、午下尅より未下尅迄京都火事、禁裡炎上

承応二癸巳年 重直公御下向後江戸御日記

一 九月四日、松平出雲殿・安藤右京殿・両御町奉行より御切紙五  
時前ニ被下、山公事百姓共御評定所へ出申候様ニと、則望月長兵

衛百姓召連罷出候、右京殿被仰渡候へ、秋田方より論地と申分  
ハ双方より手入レ申間敷候、金山之儀、此方より長兵衛得御意  
申候へハ、其段ハ重て御相談可被仰渡候間、急右之趣在所へ申  
渡候様ニと被仰渡候

一 同日、御老中様より、今度 公方様就御任官登り候使者、明四  
ツ時分 御城へ罷出候様被仰下、同五日、甚五左衛門ニ藤右衛門

同道上り候之処、御奉書と京守様御渡、御拾一重拜領之  
同日、御評定所にて境目之義被仰渡候段、長兵衛・内蔵助同道ニ

て越前殿へ参申上候へ、公義より被仰渡候義、是非もなき儀ニ  
候、安藤右京殿・松平出雲殿へ参、念のためニ候間、在所へ御切

紙成共御状成とも被遣被下候様ニ可申上候、松平伊豆守殿へも  
参候て、今日之被仰渡御耳ニ相立候様ニと被仰候付、三人様へ参  
候、何も御留守、其日ハ申置、翌朝右京殿・出雲殿へ参候、右京  
殿ハ御対面、ケ様之義、何方へも御状被遣候義無之候へ共、遠  
国之儀候間、御状今日御相談被成被遣義も可有之候、昨日之被

仰渡早々在所へ申越候様ニと被仰候、出雲殿ハ右京殿ニ御相談  
可被成と御返事ニ候、御用無之候へ、百姓下し可申哉と申上  
候へハ、金山之義御相談被成、押付可被仰渡候間、指置候様ニ  
と、是ハ右京殿被仰候

一 十一月朔日、鹿角境目之儀ニ付被仰越候、宮城越前殿へも御書被  
遣候、翌二日之朝、内蔵助・寛左衛門・長兵衛御書持参仕頼候

へハ、伊豆様・豊後様・右京殿・出雲殿へ参、御断申上候様ニ御  
指図御座候付、殿様より之御口上書相談仕調、同晩ニ追て三  
人持参、懸御目候、一所ニ所御直し被成候、御老中様へ右之口上

致伺公申上儀、いかゞ可有御座と得御意候へハ、右京殿・出雲  
殿御両殿へ迄伺公致申上候へと御指図ニ付、内蔵助・長兵衛同

三日朝、此御口上申上候、秋田より南部境目論所、先日御評定  
所にて被仰渡候通、山城守方へ申遣候処、先年論地と申懸られ候

通りをも百姓共迷惑仕候へ共、公義を恐手入不為仕候処ニ、又  
候哉、近年村々之うへ迄論地と申懸候処ニ、申懸られ候所々無

残手入為仕間敷由今度被仰付候、左様御座候へハ、其村々百姓  
共前代より曲物以下迄仕来り申所ニ御座候、只今右之所へ手入

不仕候へハ、朝夕之薪等取申儀不罷成候、閑様にてハ亡所ニ可罷  
成候間、前々のことく被仰付被下度旨、百姓共申候付て、右之

趣申越候間得御意候、右之御口上出雲殿へ致伺公直々申上候、  
境目之儀ハ、双方より論仕処御検使被遣儀、遠国早速も不成下

之公事なとも候へハ、上様ニハ御若年如何と被思召、先手入  
不仕候様ニと被仰渡候、併百姓共迷惑仕段被仰越候間、御老中へ

は念比ニ可被仰由御意候、安藤右京殿も御直ニ右之御口上御聞、  
先日之御請ニ候間、御評定所へ罷出可申上候、百姓共迷惑仕候

通、併申付候と此位ニ申上可然と御指図被成候付、同晩又越前  
殿へ致伺公、右之御兩人被仰候通申上

一 十一月六日、右京殿被仰候も尤ニ候間、御評定所へ罷出被仰渡候

通奉得其意申付候、併百姓迷惑仕候と申上可然と御指図にて、  
内蔵助・長兵衛今日御評定所にて川勝与左衛門を以右京殿・出  
雲殿迄申上候、十四日御聞可被成候間、評定所へ百姓出し可申  
候、明七日之朝ハ、右京殿へ絵図持参仕候様ニと被仰渡、次日、  
絵図長兵衛持参、絵図御留置、百姓ニも御尋無之罷帰候、同十四  
日ニ古人共長兵衛召連罷出候へハ、重て御聞可被成と御返し被  
成候

一 極月廿六日之朝、鹿角古人之儀、宮城越前様へ得御意ニ参候処、  
途中迄御切紙被下、昨日安藤右京殿被仰候ハ、南部百姓下シ候  
様ニと被仰候間、早々下シ候へと越前殿被仰渡候間、絵図之儀、  
右京殿へ去ル七日ニ上置申候、得御意候てハ如何可有御座と申  
上候へハ尤ニ候、致伺公得御意候へと被仰候付、同廿七日之朝、  
右京殿へ参伺申候へハ、佐竹殿絵図も留置候間、指置可然と被  
仰御返不被成、勘太夫・長兵衛・古人正月三日ニ下シ申事

承応甲午三年

一 五月十日、御茶壺安田覺太夫付登、六月廿七日、從京都江戸へ  
下

一 六月四日、御評定所より松平伊豆守様其外より御切紙参、御家  
来一人可被遣由、内蔵助被遣候、秋田・南部論地双方出合論地  
ニ絵図仕候へ由、只今迄双方より上り候絵図相違候間、互ニ起請  
を書有様ニ一紙ニ絵図仕上候様ニ被仰渡之、佐竹殿衆彼地にて  
双方寄合絵図仕候義、こまかく罷成間敷由ニ被申、此方ハ山境存  
候者有合不申、御用之義可承計ニ此者指越候由御返事ニ付、とか  
く其儀不申候、上杉殿・相馬殿絵図為御見可被成候間、右京殿  
へ可参由、是ハ神尾備前殿被仰渡候、越前殿・筑後殿へ内蔵助  
被遣ル

一 六月五日之朝、右京殿へ内蔵助被遣、山境存候者有合不申候間、

呼ニ在所へ遣し可申哉被得御意候、明日佐竹殿衆ニも評定所へ出  
候様ニ申渡候間、先御家来評定所へ可被遣由、御返事ニ候

一 六月六日、立寄合にて御老中ハ御出不被成候、内蔵助・惣右衛  
門二人被遣候、先年論地にて伊賀・安芸判形仕候絵図御出、爰  
元にて双方之絵図合候様ニ仕義、可被成候哉と御尋候、佐竹殿衆  
も何共御請不申候、追て右京殿被仰候ハ、其所にて絵図仕候  
義、可成候哉と御尋候、佐竹殿衆大キ成山ニ御座候間、いか、可  
有御座と被申上候へハ、左候ハ、大寄合之節、御老中へ其段可  
申上由被仰候、將監殿被仰候は、南部家老出合判形之絵図証拠  
ニ可成由被仰候へハ、備前殿尤候由被仰候間、内蔵助申上候ハ、  
此絵図之義、先年証文ニ罷成義ニ候所、山境存候者申わけ仕証文  
ニ罷成由承候と申候へハ、右京殿被仰候ハ、判形有之上ハ証  
文ニ成間敷にてハ有之間敷と被仰候、御尤候へ共、様子慥ニは不  
存候、右之通承候と申上候、其後佐竹殿衆此絵図ニ付、此方より  
半右衛門と状かわし候、其状罷出候と被申候へハ、山城殿ハ山  
境不存候間、不及申候由被仰、山境存候者在所へよひニ遣し可申  
由被仰渡候、則六日ニ長兵衛・勘太夫よひニ申遣候

一 七月七日、目時勘太夫・望月長兵衛・抛人罷上候事

一 七月十日、秋田・南部両境論地山境存候者為召上候由、安藤右  
京殿・松平出雲殿へ内蔵助為御使被仰遣候事

一 八月十八日、白ノもす公方様へ御上ケ、牧野佐渡守殿へ内蔵助持  
参之

一 八月廿二日、御評定所へ長兵衛・勘太夫・抛人被召出候、伊豆  
守様御出之由

一 八月廿六日、秋田・南部山境之義、御老中様・寺社奉行衆・御  
町奉行衆・大横目衆被仰入候、御使勘左衛門、内蔵助案内、御  
口上之事、秋田領・私領分山境之義、百姓共度々被召出御尋ニ  
御座候、御検者をも申請、境目被 仰付被下候様申上度奉存候

へ共、遠路之義御座候へハ、御檢者之義、不被申上候、今度被仰出候通、双方証拠人共ニ如何様成かたき義をも被仰付彼地へ出合、絵図を一紙ニ仕指上、其絵図を以如何様と成とも被仰付被下候ハ、忝可奉存候、ケ様候儀、誰を以可申上義候へ共、其段如何と存、乍慮外以使申上候

九月廿日、卯尅 禁裏様崩御之旨、廿四日ニ江戸へ申参

九月廿五日、御茶つは取ニ野辺地伊右衛門被遣之

明暦二丙申年

一 正月五日、御門松・しめなわ納之

一 同六日、寺社御礼、七日、諸職人・町人御礼

一 同八日、北岩松、知行五百石病死ニ付被召上

一 同日、一方井門内、知行五十石病死ニ付被召上

一 同日、御料理方長嶺七之丞、御切米三駄式人ふち被下、証文出之

一 同十一日、御城御居間にて、永福寺・広福寺其外衆徒共三十三人ニて大般若御執行、右ハ旧冬永福寺へ被為成候節、四季大般若可被遊由被仰出ニ付、正・五・九月ハ十一日、極月ハ十三日ニ相極ル

一 同十三日、下田子村觀音別當持地、年貢米之内式駄つゝ、慶長十一年より毎年為御寄進南宗院様御印有之、祢宜持地、今度給所被成下候間、御寄進米式駄つゝ、明暦元年より御給所中は毎年預り御蔵より渡可申と、三戸御蔵奉行金田一七郎左衛門方へ証文遣之

一 同廿一日、田代九郎兵衛御ふち被召上候事

一 三月九日、御小組之内太田重右衛門、今度於八戸不達者仕候由ニて御ふち被召上

一 同十七日、御家中御給人百五十石より上、御縁組被仰付候、改

人船越与兵衛・下河原武右衛門兩人今日被遣、自然自分ニ縁与仕者有之候は、向後跡式をも被下間敷旨被仰渡

一 三月十九日、佐々木三十郎跡目不被下

一 同十九日、御家中縁組被仰付、中野右馬助姉數馬殿中野直勝へ、中野右馬助二番め姉湊九郎五郎、横田左近右衛門娘小野寺源五郎、大萱生長左衛門娘中野伊折、桜庭兵助娘下田惣八、一方井刑部娘毛馬内鞠負、中野吉兵衛姉娘漆戸三郎兵衛、中野吉兵衛二番め娘毛馬内三左衛門、右之通今日被仰付

一 三月廿日、縁組被仰付衆、蛇口藏人娘大釜福松、大釜彦右衛門娘八戸三五郎、平山伝右衛門娘柴田長左衛門、小野寺六右衛門娘波々伯部喜太郎、中里半兵衛娘大萱生庄右衛門、江柄九郎兵衛娘佐羽内与吉、日戸左兵衛娘松岡三十郎、織笠斎宮娘七戸彦六殿、工藤勘丞さき松原半三郎、まっ今日申渡之

一 同廿一日、縁組被仰付、儀俄八郎兵衛娘山田一郎兵衛、松原治兵衛娘中野門九郎、湊一郎右衛門娘横浜金十郎、四戸所左衛門娘秋田右市助、宮長山三郎妹織笠右市助、儀俄弥五左衛門娘帷子太郎八、今日申渡之

一 同廿二日、縁組被仰付、織笠斎宮妹平山彦左衛門、八戸弥六郎娘上田伝丞、八戸弥六郎姉娘下田与伝次直へ今日申渡之

一 同廿五日、卯下尅江戸へ御登

一 同廿六日、愛宕御坂櫓之石切奉行台孫助今日申付之

一 四月八日、江戸御屋敷御掃除坊主松岡一入・道羽久説、昨日下午着

一 同廿二日、御小姓石井九郎兵衛、煩候て御用ニ不立由申ニ付、御ふち被召上候間、其段可申渡由にて、九郎兵衛江戸より御下

一 同廿五日、久慈十兵衛、江戸へ御供ニ罷上道中にて落馬仕、御用ニ不立候付御下、御扶持被召上之旨可申渡由にて、馬場三之丞ニ申渡之

一 閏四月朔日、御家中御鉄炮御同心、今日より六月晦日迄星放被仰付、御鉄炮玉棄渡之

一 同十六日、花巻御城ニ御建立被成八幡・弁在天・稻荷三社御堂入、去ル十三日吉日ニ付、八幡寺・成嶋寺・観音寺、此外別当金剛院・山伏逸明院・覚善院・法正院・万正院、何も罷上、御神楽・御湯立・御詫宣一段ニて御祝儀之餅一箱、披塩引二枚、岩間左市之助より上ル

一 六月廿一日、愛宕御坂きたはしの石割同心、一方井刑部・中里半兵衛同心此二組ニ仰付、儀俄十右衛門・柴田長左衛門・赤尾又兵衛同心之代

一 十月十四日、御馬買黒沢李助殿・水野小左衛門殿盛岡御着

一 同十五日、儀俄十兵衛御暇被遣、堀切半五郎も御ふち被召上

一 十二月十二日、老歩判三十両、如例年方長老へ御合力金、御使岡本孫左衛門ニ被遣之

明暦三丁酉年

一 二月廿一日、<sup>(御儀)</sup>殿様御下向、今日御着城也

一 三月十三日、御城六時之鐘御町方へ遣し、御城ニてハ太鞍打可申由被 仰出候付て、教浄寺より太鞍取寄、今日酉刻より打始

一 同日、茂市三太夫・川守田弥五兵衛・四戸李助・光間六右衛門・小山田源兵衛・塗師与三郎・織笠万右衛門・とき万七・大竹宗休・菊池善二郎・蛇口喜伝二・鵜飼甚兵衛・菊池宗右衛門、跡目不被仰付之

一 同廿日、福嶋御宿小嶋彦右衛門、杉原三十帖献上之

一 同廿四日、栗谷川へ御鷹野御出、御供人数之内、八幡良清<sup>(イハレ)</sup>

一 同廿九日、御城有之鐘御町方へ被遣、とつこへもりニをゐて今卯<sup>(卯)</sup>冠より鐘撞始

一 同晦日、上田へ御鷹野御成、昼弁当场小笠原良清<sup>(イハレ)</sup>

一 四月朔日、<sup>(毛馬内長次)</sup>九左衛門・<sup>(藤戸正徳)</sup>勘左衛門、常ハ御用調候間臥候処ニ、今晚より長郎下ニ臥り可申由被仰付、<sup>(イハレ)</sup>勘左衛門寝始

一 同十八日、江戸御町奉行石谷将監殿<sup>(イハレ)</sup>

一 五月十日、已刻より御家中役之馬自身乗被 仰付、百三十一疋御覽、右之内馬計出候方ハ御馬責乗、懸御目

一 六月十八日、花巻御蔵米六石ハ、伊達領石巻御米宿治右衛門所へ為先例被遣之、納俵ま<sup>(イハレ)</sup>

一 六月廿五日、意方より御訴訟、川森田弥五兵衛世倅、只今及飢命不便存候間、御草履取ニ成共被成、老人御ふち方成共被下度由被申候付、<sup>(藤戸正徳)</sup>勘左衛門・<sup>(毛馬内長次)</sup>九左衛門右之通申上候処、御切米式十駄被下由御意ニ付て、檜山友之助ニ申渡之

一 七月朔日、初米一袋、門明神別当任嘉例献上之

一 八月五日、鹿角御境目花輪村へ毛馬内九左衛門<sup>(長次)</sup>知行替、九左衛門跡地毛馬内村へ桜庭兵助<sup>(由之)</sup>知行替、毛馬内鞠負知行所大湯村へ赤尾又兵衛七百石、同伊兵衛三百石知行替、右之旨今日被仰出、<sup>(藤戸正徳)</sup>九左衛門・<sup>(藤戸正徳)</sup>勘左衛門奉申渡之

一 八月十六日、郡司与左衛門、石巻ニ為御用御蔵立之材木之事

一 四百五十四本、檜、長式間半、六寸角 一式百九十本、同木、長二間半、五寸角 一三百本、同木、丸太長二間一尺、末口一尺七寸廻 一三百本、同木、乘木長三間 一式百枚、

桂、志戸板 六万枚、檜・桤、長六尺 三十枚、桂、長三間、平物・引物 右之通手形兵助<sup>(藤戸正徳)</sup>・<sup>(藤戸正徳)</sup>勘左衛門両判ニて川下通

出ス、但、旧冬勘左衛門・<sup>(八戸直義)</sup>弥六郎・<sup>(松岡正吉)</sup>藤右衛門三人ニて相談之上、石巻ニ御蔵立候筈ニ究手形出ス

一 同十九日、御鷹大緒十筋、下米買郡司与左衛門献上之

一 九月八日、高野山遍照光院より使僧一人来着、宿広福寺、但、御領分中御札守廻度之由申来

- 一十月十二日、仙台にて子籠塩引仕習ニ、御料理之高橋寛助被遣、仙台国分町竹田甚右衛門へ状一通、勤左衛門 兵助より右寛助ニ渡、足沢兵部預御小者一人添遣 但、十月廿六日寛助罷帰
- 一同十五日、已尅御馬買中山勘兵衛殿・諏訪部文九郎殿御下着 但、勘兵衛殿御息半左衛門殿御同道也
- 一十月廿四日、江戸御留守居柴田長左衛門被仰付、下田寛左衛門代
- 一同廿八日、毛馬内九左衛門<sup>(長次)</sup>へ御成、御馬買勘兵衛殿・同半左衛門殿・文九郎殿も一所御出、寅尅御帰城<sup>(南無)</sup>
- 一十一月三日、門屋庄三郎所へ、殿様被為成、御馬買勘兵衛殿・文九郎殿も御出、子尅御帰
- 一四日、門屋庄三郎昨晚御膳上候付、盛岡御蔵米六十俵被下
- 一六日、勘兵<sup>(衛)</sup>へ殿・文九郎殿辰尅盛岡御立
- 一七日、御勘定頭布施庄兵衛・田鍬太郎左衛門・江刺<sup>(左)</sup>ケ兵左衛門三人御勘定役御免、右之代仙石二郎兵衛・久慈弥二右衛門・堀内三右衛門被仰付
- 一十四日、毛馬内鞠負方ニ奉公仕候山口半九郎ニ、当暮より新儀ニ御切米三十駄被下、盛岡御蔵にて手形出
- 一十五日、ト<sup>(イ)</sup>角屋宗琳献上之
- 一十一月十六日、年寄候者并煩候て御奉公不相勤者、身代被召上候寛、小西在庵・荒木田宮内・山口茂左衛門・葛岡治右衛門・鬼柳吉左衛門・高橋源兵衛・小立孫七・織笠門兵衛・吉田平右衛門・石井勘五郎・台弥助・立花新九郎・あかしや左京・佐々木助八・関甚内・普代五郎兵衛、右十六人、御横目北川半右衛門・大矢三郎左衛門を以申渡之
- 一同晦日、朔日・十五日・廿八日御礼ニ御家中・高知衆御城へ罷上候事、重てハ御触無之候ハ、罷上候儀無用可仕由被仰出、

右之旨桂七郎兵衛ニ申渡之

- 一十二月十三日、聖寿寺大鉄病者ニ付隠居願上、其通被仰付、八戸ノ旬峯御城へ呼寄、聖寿寺へ直り可申由、兵助<sup>(左)</sup>・勘左衛門<sup>(正)</sup>申渡之
- 一十二月晦日、御扶持被召上候者、蛇口喜左衛門・荒木田半兵衛・坂牛五右衛門・田鍬長九郎、此四人也

万治二己亥年

- 一正月元日、任例樽一荷・肴一折干鮭二尺、蛇沼惣左衛門上之
- 一二日、石井伊賀入寺仕、其上知行物成其儘指置、盛岡屋敷をも明可申由、石井又四郎・桜庭与十郎・小川権左衛門、此三人を以申付候付、野辺地城番仕者、家来駒木吉左衛門・中村新左衛門・同監物・木村清兵衛、此四人申付由、小川権左衛門を以伊賀申上
- 一同日、伊賀家来之者御預被成寛、安村弥一右衛門ニ四郎右衛門・横田左近右衛門・三郎四郎、舟越与兵衛ニ伝左衛門、右之通北川新右衛門を以申付之、伊賀家屋敷之番小川権左衛門ニ申付之
- 一十一日、於本御居間御祈禱・大般若執行、永福寺・大庄嚴寺・長谷寺、此外永福寺衆徒共ニ朝粥、晚食
- 一十四日、御門松・御しめなわ今日納
- 一二月廿八日、仁王之於馬場、役馬共<sup>弥六郎 藤右衛門</sup>見改之
- 一三月四日、八戸御城代葛西庄兵衛・内堀織部<sup>(トイ)</sup>
- 一五日、去年道筋通ニ松・杉植候、枯候哉見改、枯候ハ、為植候様ニと、御徒頭池田先右衛門ニ御徒二人添、盛岡より鬼柳迄今日遣
- 一七日、奥郡道筋ニ為御植被成候松・漆之内、枯候有之候ハ、見改為植遣可申由、三上勘九郎・本堂全兵衛、此二人遣、但、御持筒之者一人付遣

- 一 十一日、新山渡舟一艘作立候御祝之入用品々、御舟奉行刈屋金助へ渡
- 一 廿一日、盛岡中御町奉行岡本孫左衛門被仰付、滝沢三郎右衛門相手
- 一 廿三日、御座敷之内、白木之間より表御番所迄、御畳表替被仰付
- 一 四月二日、於常陸国似錢<sup>⑤</sup>仕者欠落仕候付、陸奥国中相改可申旨にて、御老中様より御廻文一通、二本松家老丹羽少兵衛・樽井弥五左衛門・日野新右衛門より右御廻文ニ添状一通、八戸弥六郎へ去月廿六日付、使者吉田七兵衛上下七人にて今日来着、御町奉行岡本孫左衛門持参上ル、使者へ米五俵、披塩引十枚、樽一荷五十盃入被遣之
- 一 三日、御老中より之御廻文一通、同添書一通、并津輕家老へ状一通、<sup>弥六郎</sup>九左衛門より之三通、津輕へ今日御使者悪津平兵衛ニ為持遣<sup>藤右衛門</sup>
- 一 六日、明後八日薬師祭礼ニ付、為警固舟越与兵衛同心召連可参之旨、北川新右衛門を以申渡之
- 一 八日、馬門村御境御番ニ末崎清右衛門申付、但、三戸給人老人相加、二人にて番仕筈
- 一 五月三日、志和稻荷堂御建立、大稻荷・小稻荷二社共御遷宮
- 一 十一日、本御居間大般若転読
- 一 十七日、桂七郎兵衛預候同心四十五人内三十人、桂源五左衛門ニ御預、残十五人御町同心ニ被仰付、岡本孫左衛門ニ渡ス
- 一 六月十八日、盛岡新山渡御座舟壹艘作立候御祝入用<sup>①</sup>ニ渡ス
- 一 七月八日、於江戸御抱罷下候川嶋寛右衛門、七人ふち当月三日より毎月大小指引、一日老人五合つゝ相渡候様<sup>①</sup>ニ渡ス
- 一 九月八日、江戸より御下被成櫓引八幡へ御かけ被成狩野右京筆白ノ鷹之絵、来ル十一日吉日ニ付かけ可申と、今日別当普門院へ

- 同心ニ遣之
- 一 廿四日、野辺地城番漆戸<sup>①</sup>勘左衛門被仰付、下田将監組同心三十人同人ニ御預被成由、江戸より申来
- 一 同廿三日、勘左衛門江戸より罷下
- 一 廿八日、石井伊賀家内改帳一通、同目錄一通、改人高橋九郎左衛門・桂源五左衛門上之
- 一 廿九日、伊勢内宮太郎館大夫、御領分之内御祈禱御被賦候付、伝馬四足借申度旨、御町奉行を以披露<sup>①</sup>ニ渡ス
- 一 十月五日、御馬買中山勘兵衛殿・諏訪部文九郎殿未<sup>⑤</sup>尅盛岡へ御着
- 但、十月廿四日盛岡御立
- 一 六日、<sup>⑤</sup>殿様今日花巻迄御城着
- 一 八日、<sup>⑤</sup>殿様<sup>⑤</sup>未下<sup>⑤</sup>尅盛岡御着城、御供<sup>毛馬内九左衛門</sup>奥<sup>奥瀬</sup>治太夫
- 一 十一日、七戸<sup>⑤</sup>隼人殿為御使者今日江戸へ御上
- 一 十八日、花巻御給人栗屋川五兵衛、病人にて御用立ず身帯被召上候間、其段可申渡旨、<sup>望月長兵衛</sup>松岡寛助へ申遣
- 一 十一月朔日、八幡普門院へ被為成、御供<sup>九左衛門</sup>勘左衛門<sup>治太夫</sup>
- 一 同二日、今度被召抱江戸より下候大浦八左衛門、式百石被下知行也
- 一 四日、浅田五郎左衛門依願御暇被下
- 一 十七日、石井伊賀儀、八戸<sup>⑤</sup>弥六郎へ御預ケ、遠野へ被遣之
- 一 廿八日、御家中御給人御切米大小不寄、娘之分十より上三十迄改、書付上可申候、隱密仕内々にて縁組仕者候ハ、双方共ニ可為迷惑候、以来縁与仕者候ハ、御老中迄窺縁与可仕旨被仰出
- 一 十二月十三日、於本御居間大般若御執行
- 一 十七日、江戸へ為登米、四斗式升入式万俵<sup>①</sup>ニ渡ス
- 一 廿四日、御家中役馬、式百石より上自身乗、今日 上覧、馬数



百足

一 廿五日、御家中役馬、式百石より下、五拾石より上、御切米五十駄より上自身乗、御覽

一 廿七日、御煤おろし

一 廿八日、御右筆被召抱、渡辺源三郎今日始て御目見

一 同日、御町奉行岡本孫左衛門代、長谷川又左衛門被仰付、滝沢三郎右衛門相手

万治三庚子年

一 正月五日、申下刻御門松・しめなわ納ル

一 正月六日、如嘉例今日御家中・出家衆・諸職人・町人御礼、巳尅より至午尅、永福寺・聖壽寺・報恩寺・東禪寺・教浄寺、此

五人御座敷、御雑煮・引渡・御吸物三献、其外如例町人ハ大書院三ノ間ニ並居、殿様被為成一度ニ惣礼也

一 九日、今日八日之筈ニ候ヘ共、曆之通九日ニ直ル、盛岡御町在々ヘ右之趣申遣之 私ニ旧臘私大ニ付て也

一 廿一日、新儀ニ被召置候大槻八郎兵衛御目見

一 廿三日、殿様八戸ヘ御鷹野御出、御供九左衛門・治大夫、御留守居弥六郎・勘左衛門・藤右衛門

一 二月十四日、道中両脇ニ為植候松ちいさく候間、一間か一間半之松、一間ニ一本つゝ為植可申由、花巻・郡山・沼宮内・福岡ヘ以状申遣

一 十六日、道筋両脇ニ松植させ候奉行、盛岡より中山迄福田六之助、從盛岡石鳥屋迄四戸弥五右衛門、此二人今日申付遣

一 三月八日、殿様八戸より御帰城

一 九日、御小納戸山田惣右衛門御暇被遣、鬼柳御境目迄岩間左市助附被遣

一 十二日、日野左五右衛門預御步行抱候田子惣兵衛、今日より式

人ふち(ハナ)

一 十五日、黒沢尻ニ市相立申度と、御代官上崎治左衛門・中村門右衛門を以申上被仰付

一 廿日、中山より奥郡之分、そろろく御加増廿石、三戸郡新井田村被下、対泉院ニ被仰付、報恩寺ヘ被仰渡

一 かいふき候久慈長九郎ニ五駄式人ふち被下

一 廿二日、黒沢尻町九日市ニ望候付、市札花巻城代ヘ遣之

一 廿三日、卯半尅、殿様御参勤御上、御供治太夫

一 廿八日、順正寺之番飯豊又市申付、山田多右衛門相手、順正近比登候付、寺ニ有之道具・植木等改(ハナ)

一 十月十四日、御馬買秋山六左衛門殿・諏訪部文右衛門殿盛岡御着

万治四辛丑年

一 正月十五日、御門松・御年なわ、藤右衛門登城納之

一 三月廿日、明廿一日於永福寺如例年制界、為警固舟越与兵衛同心共ニ遣之

一 五月四日、殿様去月廿二日御暇被遣候由申来

一 同十九日、去ル五日より寛文と替候由申来

一 七月十六日、去ル五日江戸御立、今年上尅、殿様御着城

一 八月三日、御扶持被召上候御小組大石弥五左衛門・久慈与三郎五駄、御步行ハ野田右市助預十二目十郎兵衛四駄・豊川市左衛門同・蛇口弥兵衛同・市川新右衛門預佐々木弥吉同・本宿弥惣兵衛同・池田先右衛門預杉宮左太夫同・工藤宇右衛門同・堀内仁左衛門同・馬場三丞組大釜又三郎同・日野左五右衛

門組四子惣兵衛同、以上十二人也

一 八月八日、志水源右衛門盛岡町奉行被仰付、太田縫殿助相手

一 同日、御暇被下候覚、松井左兵衛<sup>五百石</sup>・上田平八<sup>四百石</sup>・大

釜彦右衛門<sup>五百石</sup>・岡井立斎<sup>百石</sup>・同立慶<sup>五人</sup>・西山藤左衛門<sup>貳百</sup>

石・益田市右衛門<sup>百石</sup>・室岡源兵衛<sup>五十石</sup>・星川宗十郎<sup>百石</sup>・高

杉新十郎<sup>十五駄</sup>・一条助兵衛<sup>百石</sup>・末崎清右衛門<sup>五十石</sup>・宮長山

三郎<sup>貳百</sup>・長牛弥四郎<sup>貳百石</sup>・鳥屋九右衛門<sup>貳百石</sup>・四戸甚兵

衛<sup>百石</sup>・松原治兵衛<sup>百五十石</sup>・中野権右衛門<sup>切米</sup>・松岡七右衛門

百石・小保内源右衛門<sup>六十石</sup>・八木沢八郎左衛門<sup>七十</sup>・佐々木孫

四郎<sup>切米</sup>・石沢善次郎<sup>百五十石</sup>・大崎七兵衛<sup>切米</sup>・榎山三郎

兵衛<sup>百石</sup>・又重兵左衛門<sup>七十石</sup>・高木与五兵衛<sup>五十石</sup>・小泉伊伝

次<sup>五十石</sup>・安ヶ平助二郎<sup>百石</sup>・右廿九人、毛馬内九左衛門<sup>屋敷ニ</sup>

て申渡之<sup>上野久兵衛<sup>百石</sup>・大町宇右衛門<sup>百石</sup>・此二人御暇被下候由、</sup>

奥瀬氏ノ別記ニ有之

一 同日、辻五郎右衛門<sup>廿五駄</sup>・一条覚左衛門<sup>廿五駄</sup>・川口左近

拾駄・須藤喜兵衛<sup>五駄</sup>・川村喜右衛門<sup>四駄</sup>・佐藤外記<sup>三駄</sup>・右六

人、江戸等之御奉公勤兼候付御暇被下候、御ふたい之者候間、

何方ニ罷有候とも勝手次第可仕由御意、右可申渡由、花巻御城

代<sup>一方井刑部</sup>以状申遣之

一 同日、石龜弥五郎<sup>百石</sup>・中里弥五郎<sup>五十石</sup>・川守田兵庫助<sup>高貳十</sup>

石・留目又二郎<sup>百石</sup>・田子参郷<sup>高十八石</sup>・右五人同断、三戸城代

谷村惣兵衛<sup>以状申遣之</sup>

一 同日、馬医庄左衛門<sup>三十駄</sup>・御馬方似鳥助五郎<sup>十五駄</sup>・小林六郎

五駄・鈴木久右衛門<sup>五駄</sup>・平原助九郎<sup>四駄</sup>・此人数も身常被召上候

由、奥瀬氏別記ニ有之

一 同日、親跡目<sup>三百石之内</sup>・親父跡式<sup>三百石之内</sup>・百石望月弥太郎<sup>百石</sup>・小野寺源五郎被下

一同日、小屋敷平左衛門子与五兵衛・荒木田左内子勘三郎、親跡

目不被下、家屋敷御取上、知行御蔵入ニ成ル

一 十五日、上田平八江戸へ登、男上下三人、女上下二人

一 十七日、盛岡より中山迄之道筋・道脇ニ植候松枯候歟、植様悪

敷候ハ、指図候て為植可申由、工藤権大夫・田中久太夫、御歩

行矢口庄左衛門、御小与横浜太郎右衛門・中里半九郎、此五人

ニ今日申付、但、道せまき所ハ脇切ひろけ植可申候、岩など候て

植候事不成所ハ、其ま、指置候様ニと申付

一 同日、三戸御給人之内留目又二郎義、去ル十日ニ御ふち被召上

候処、御野馬之別当仕候由被聞召、跡方之通御ふち被下候間、

御野馬無油断相守候之様ニと可申渡由、御城代大ヶ生左衛

門・笠間三之助へ申遣之

一 十八日、松井左兵衛上下六人ニて江戸へ登

一 廿三日、表御番帳三番ニ被仰付今日出、御番頭赤尾又兵衛・葛

巻新六郎・江刺兵十郎、三人被仰付

一 同日、岡井立斎・同立慶江戸へ登

一 廿四日、年寄共三人之内、当番之者ハ白木之間ニ昼夜相詰居候

之様ニと被仰出候付、当番治太夫今朝より白木之間ニ詰ル

一 同日、御暇被下大崎七兵衛・同子甚左衛門、仙台領之内大崎へ

被参

一 廿六日、鬼柳境西山藤左衛門上下三人ニて昨廿五日ニ通候之由、

松岡寛右衛門より状ニて申上ル

一 閏八月四日、御料理小立善太郎<sup>四駄</sup>・御食炊平野原庄二郎<sup>三駄</sup>、

右御ふち被召上

一 八日、泉山兵藏<sup>高十四石</sup>・種市勘兵衛<sup>五駄</sup>・梅内善四郎<sup>貳駄</sup>・山

口九郎兵衛<sup>同</sup>・苦米地弥五作<sup>貳駄片馬</sup>・米内七之丞<sup>貳駄片馬</sup>・

泉山佐左衛門<sup>貳駄片馬</sup>・米内茂右衛門<sup>貳駄片馬</sup>・佐々木理右衛門<sup>貳駄片馬</sup>・泉山半左衛門<sup>貳駄片馬</sup>・一条覚之丞<sup>貳駄片馬</sup>、右拾参人

御ふち被召上

— 35 —